

# 第 分科会(児童会・生徒会、クラブ活動部会) 自発的、自治的に活動し、異年齢集団のよさを生かした 人間関係を形成する児童会・生徒会活動、クラブ活動

## 1. 研究内容

### (1) 異年齢集団活動のよさ

かつては異年齢での小集団が地域の中に数多く点在し、その集団の中で、他者の立場の理解と客観的思考・コミュニケーション能力・感情の表出とコントロールなど社会生活に必要な資質や能力を獲得していたが、人間関係の希薄化が進む現在では、学校規模に応じて、異年齢の子どもたちが触れ合う活動を意図的・計画的・継続的に実践することが求められている。

### (2) 自発的・自治的な活動づくり

子どもの発意・発想に基づきながらも、教師の適切な指導の下に、子どもによって活動計画の作成がなされ、子どもによる活動が展開できるようにすることが大切である。全教職員の共通理解と協力のもとに、子ども自らが進んでよりよい活動づくりに参画できるような組織的な指導が必要である。また、地域の人々との連携、社会教育施設等の活用を工夫することも社会の一員としての意識を育てる上で大切にしたい。

## 2. 提言の要旨

### < 提言 1 >

～ 児童に学びがいを実感させる

意図的・計画的な児童会活動の指導～  
網走市立西が丘小学校 教諭 佐野 正樹  
提言内容

実践は、視点 1 として児童会活動を取り巻く環境を整えること、視点 2 は個の変容を促す実践活動の展開～運営委員会での取組～の 2 つの視点を設けて発表した。

視点 1 では、ねらいや取り組み方の明確化 見通しをもち取り組める活動計画の作成について述べた。では、教職員との共通理解を図るための評価ワークシートの提案を年度当初に行うこと、児童にも評価ワークシートについて説明し評価するこ

とで、児童の委員会への取り組み方を考えることにつながった。さらに、児童の反省を観点ごとに整理したグラフを示すことで、児童会全体の成果と課題を教員間で考えることができた。では、児童による活動計画を、児童コーナーに掲示することで、事前の見通しをもたせたり、各委員会からの集会活動の企画案を掲示することで、児童会活動への興味の高まりや学級集会との関連が図られたりする効果が生まれた。

視点 2 では、委員会活動の進め方 学校をよりよくするための取組について述べた。では、児童会活動の効果的な進め方として、各学級での学級会と関連させたため、児童が議論を深めるための具体的な方法を深めることができた。では、運営委員会という学校の先頭として活動する委員会が、「あいさつ運動」「あいさつレンジャー」「運営祭」等の活動をするだけでなく、網走市内の子どもたちや管内小中高生との交流を図ることで、取組について振り返ることができたことを述べていた。

### < 提言 2 >

～ 共に教え合い、助け合い、協力し合って  
望ましい人間関係を築く生徒会活動～  
旭川市立明星中学校 松尾 聡

### 提言内容

実践は、二大ボランティア活動について、ボランティア活動の 4 つの原則である「自分から行動する」「ともに支え合い、学び合う」「見返りを求めない」「よりよい社会をつくる」を意識した活動について述べていた。一つの目の活動「ノングストプロジェクト」では、校区を 15 の地域に分け、全校生徒でごみを拾う活動であり、事前にグループのリーダーと町内会長さんとの打ち合わせの元活動している。グループでは、3 年生が指導的な役割を担い、下級生の活動をサポートしている。二つ目の活動「八

ンド・イン・ハンド」は、毎年12月の第一土曜日にユニセフの募金活動を行うものであり、事前集会や班別ミーティングなど、生徒会が中心になって行っている。これらの二大ボランティア活動は異年齢集団のよさを生かした伝統的な生徒会行事となっており、上級生と下級生の教え合い、助け合い、協力し合う関係を築き、望ましい人間関係が形成されている。一方で、課題として、活動の時間の保障、日頃から自主・自立を意識した指導をしていくことが挙げられている。今後は、社会の一員としての地域のニーズを把握しながらボランティア活動のエリアを広げ、自己決定によるボランティアへと発展させることを目指している。

### 3．研究討議

#### < 討議の柱1 >

異年齢の子どもが自己の役割を意識し、自発的、自治的に作り上げる活動はどうあるとよいか。

自発的な活動にならず、教師が引っ張ってしまう実態がある。委員会も当番的活動なものだけに偏ってしまう場合が多い。改善するには、委員会活動の中で、当番的活動から、工夫できるものを一つ入れていくことが大切である。また、地域との交流会に参加することで、新しいアイデアを子どもも教師も得ることができ、次の委員会活動につながっていく。子どもの資質・能力を高めることも大事だが、教師の協働性を高めることが大切である。教師の目指すベクトルをそろえてやっていくという気持ちで活動を創り上げていく。生徒・教員も変わっていく姿勢をもち続けることが大切である。

#### < 討議の柱2 >

異年齢の子どもが人間関係を形成し、異年齢集団活動を高めていくための活動はどうあるとよいか。

小学校では、全校での交流ができるような活動を、全校朝会などで呼びかけ、進んで参加できる活動を仕組んでいく。クラブ活動は、趣味趣向が同じ子たちの集団であるので、楽しみながら自主的に取り組む力が高まる。そのため、クラブ

活動の回数を多くとっていくとよい。

小学校間の関係ももちろん大切だが、小中高のような縦の連携、地域との交流活動などを大切にするこゝで、異学年交流での人間関係形成力が高まる。

### 4．指導助言

地域と連携する生徒会活動では、地域の人材を活用することで社会貢献の精神を植え付けることできる。自己有用感・自己肯定感を高めるために、地域に根差した異年齢の活動を通して、上の学年に憧れを抱かせることが、学校の自慢、地域の自慢となつて、ふるさとに自信をもてるこゝどもが育つ。クラブ活動では計画・運営・発表でどんな子どもを育てるかという年間指導計画を大切にする。

異年齢活動の子どもの役割として上級生がリーダーになり、資質を高めることが大切である。どこまで子どもたちに任せするのか、学校体制をつくり担任がどこまでやるかという具体策を図る。教師は学びがいを教えるのではなく、引き出す関わりをする。子どもの思いと教師の思いは思うようにはいかないが、思いが合わさった時に活動を生むチャンスがある。児童会生徒会活動でどんな子どもを育てるのか、計画・実践・評価を行い、教職員が同じ方向を向いて行うこと、全体計画・指導計画・評価計画があるとよいこと、可視化を通して、学級活動と児童会・生徒会活動がどう関連付けられるかを考えることを大切にする。

### 5．今後の課題

児童会・生徒会活動とクラブ活動は、異年齢の子どもによって組織される自発的・自治的な活動であるが、実態としては教師の指導の下だけで終わっている学校もある。それを、教師同士が協働し、子どもが主体となつて活動するために年間活動計画・指導計画・評価計画を作ることよりよい学校・地域社会への参画意識を育てる実践を積み重ねていくことが課題である。

